

キューポラのある街



キューポラのある街

1



キューボラのある街 (1)

キューボラのある街

© 1972 年 6 月 第 34 刷

定価 500 円

作 者 早 船 ち よ

発行者 小 宮 山 量 平

東京都新宿区若松町104

発行所 株式会社 理 論 社

電話東京 (203) 5791=代表

振替口座東京 95736

0393-90601-8924

1963年初版発行

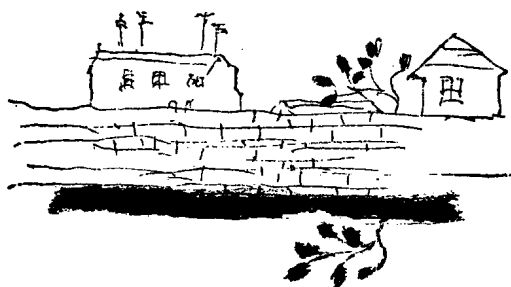
たくさんの壁

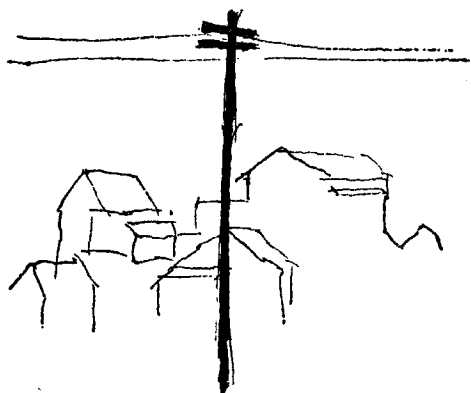
その壁をのりこえる

たくさんの伸びゆく者たち

——に

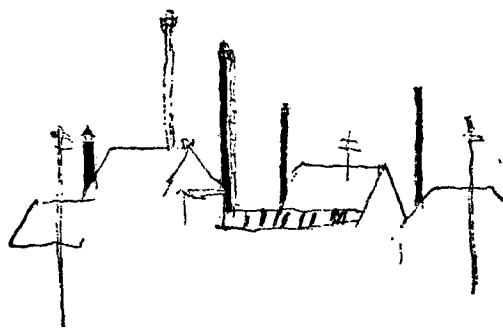
——まえがきに代えて





もくじ

1 生むこと、生まれること／	5
2 少年とゆがんだ電柱の影／	22
3 口紅のにおい／	42
4 パチンコ横丁／	58
5 ほんとうの生活／	75
6 夜の工場街／	94
7 初冬のあさ／	109
8 職人氣質／	117
9 キューボラのある街／	126
10 生きてゆくためには／	142
11 わたしのふるさと／	156
12 はなむけ／	171
13 車輪のおと／	184



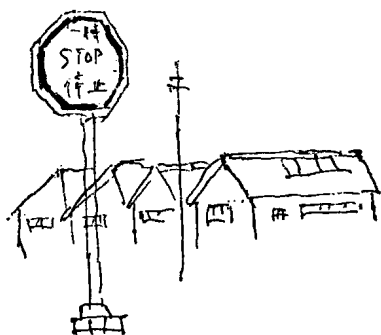
14 しごとから学ぶ／196

15 祝 祭／210

あとがき

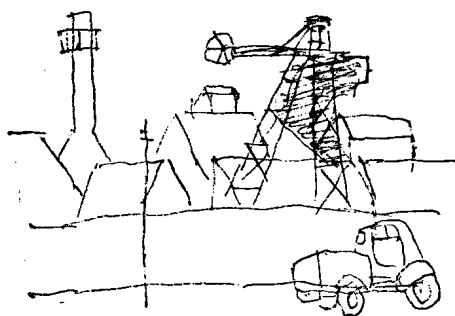
―生活のだいじなところで／224

そうてい・カット／鈴木 義治



1

生むこと、生まれること



（今夜あたりくるな）

その予感が、ジュンの気もちのなかに、なかったわけではない。

ジュンは、中学校の補習からのかえりに買ってきたコロッケを、夕食のチャブ台にならべた皿へ、二つずつくばりわけていた。

かえりのおそい父と母のぶんは、経木のつつみに分けのこしておく。まず、さいしょに弟のタカユキへ大きそうなのを二つ、つぎは叔母のハナエへ、そしてじぶんの皿にも二つのせる。肉屋は、五〇円で、コロッケを一つまけてくれた。

（きざみキャベツを、このごろ、つけてくれなくなっただ）

ジュンは、その一つのコロッケをはさんで、ちよつとためらった。食いしんぼうのタカユキが舌なめずりをして、熱心にこつちをみているのが感じられるからだ。

——これを、まるごと一つ、タカユキにだけあげるのは、不公平よ。だって、おばちゃんも

うすぐ赤ちゃんを生むんだもの。よけい食べさせてあげなきゃ。

ハナエとタカユキのために二等分しようとして、惜しくなった。ジュンは、ひとつあまったコロツケを、きちんと三つにわけて、また、チャブ台の上の三つの皿へくぼりそえていく。

そのとき、とつぜん、叔母のハナエがいった。

「もしも、今夜あたりに……」

「え？ 何かいった、おばちゃん」

ジュンは、あわてて聞きかえす。きざんだキャベツを分け、その上へ、にんじんの新芽しんめをそえて、もりつけを美しくしようとしていた。ハナエの話しかけるのは、耳にはいらなかったのだ。

ハナエは、ソバカスの目だつ鼻に、小じわをよせて笑いかけながら、

「いえね、こん夜、かあちゃんのるすの間に、赤んぼが生まれそうになったら……」

さっと、ジュンの顔いろがかわった。

「えっ、ほんと。ほんとに生まれそうなの」

びっくりしたときの目をみはって、手をとめたまま、ハナエをまじまじと見る。

「ちよっと、そんな気がしただけさ。そしたら、ジュンとタカユキだけだから、どうしようかな……」

すると、小学五年生のタカユキが口をとんがらせた。

「へっちゃらだい。安井産院へそういっていきや、いいんだろ」

「いいに行ってくれる、タカユキ？」

「うん、ぼくにまかしとき」

ハナエは、タカユキにご飯をつけながら、
「ところで、ジロー親分。押入れのなかのかいフトン袋、しよっていつてくれる」

「うへっ！ あいつを背負うの」

頭へ片手をやるタカユキを、ジュンは姉らしく気をおちつけて冷やかす。

「よわ虫！ 背負えないんだろ」

「ふうーんだ。そんなら姉ちゃん背負ってみろ」

ジュンは、それには答えなくて、煤けたボンボンだけを見あげる。七時一〇分だ。

（あと、二時間だ……よしんば、いま、それが始まったって）

九時になれば、母がビール工場の夜業をすませて帰ってくるだろう。それに父……だが鋳物工場の（炭たき）職人である父は、きょうは三日おきごとの（湯出し）の日だから、帰りは夜なかになるはずだった。

ジュンは、なにげない顔をふせかげんに、食べることに熱心そうにしている。だが、ときどき、上目づかいにハナエのようすをうかがった。

ハナエは、箸をときどきやすめて、なにかをはかるように、じいっと、外をうかがう目をした。顔色が、ふだんより青ざめてみえる。

のきば近くで、クルクルウー、クルクルウーと、ハトの鳴きかわす声がした。タカユキは、にっこり箸の手をとめて、その方へ顔をむけた。

「ハトのひながかえるんだぜ、おぼちゃん」

「そう。そんなら、いま、卵をあつためてるとこのね」

ハナエは、まどぎわまで立っていった、耳をすます。

（ハトは、もう生んでしまった。けど、ひなはまだ、生まれてこないんだわ）

タカユキの灰ゴマ色の伝書バトのメスは、一〇日ほど前に卵を二つうんで、巣についているのだ。

「ねえ、おぼちゃん。あと七日で、ひなのメスとおスが卵からかえるんだぜ」

「メスとおス？　そうはつきり、一羽ずつときまつているかね」

「そうさ。ハトはいつだって、メス・オス一羽ずつそろって、かえるんだよ」

「ふうん、ハトって、生まれるときから仲よしなんかね」

「ハトは、卵から一七日めに、ちゃんとひなになるんだ。ほかの鳥なら、メスだけで卵をかえすだろ。伝書バトなんて、かわりばんに、オスも卵を

あつためてゐるんだぜ」

タカユキは、いばつた顔をする。

「まあ、オスもねえ」

——人間よりか、このハトに生まれついたほうが、まじだったわ——と、ハナエは吐息をつく。

——赤んぼが生まれるというのに、この子のうちちゃんは帰ってこれないじゃないか。

ハナエの夫の啓吉は、天草の船主の八〇トン漁船に乗組んだ臨時雇いの機関士だった。若松通いの石炭船からのりかえて、去年の暮のサバ漁にでていった。そのまま、李ラインを侵犯したとかどで、威嚇射撃をうけ、船ごとつかまってしまった。釜山の刑務所に収容された——という便りがあったとき、それから一〇カ月近くなるのに、いつ帰ってこれるのか、目あてがつかないのだ。結婚して二年めのハナエは、啓吉が帰ってくるまで、下宿の世帯をたんで、姉夫婦のいる、この鑄物の町・川口のジュンの家へころがりこんできたのだった。

タカユキは、父の辰五郎からは「ひねくれ者のジロー」と、あだ名でよばれている。食いけ盛りで、盗み食いばかりでは足りずに、父母のるすをねらつて、小銭を持ちだしたりする。ハナエも、この家へきて一カ月ばかりの間に、二度やられた。それがばれたときの、ふてくされかたは、可愛げがなくて、ハナエは好きになれなかった。だが、そういうときのごまかしと、いいのがれのためのグズなずうずうしさとはちがつて、ハトの話をしているとき、おやと思うほど、タカユキの目はかがやいてくる。

「ね、おばちゃん。ハトは、メスもオスも、ひなにおっぱいをやるんだぜ」

「おっぱいを？　まあ、オスが、どうして出すの」

「ううん。鳥はメスだって、ふつうは、おっぱいださないさ」

「わるい子、おばさんをついだのね」

「ちがうよ。ハトは、ひなを育てるとき、おっぱ

いみたいなものを、だすんだよ。ノドから」

「へええ……」

「口うつしに、ひなの口へながしこんでやるのさ。そやって、ひなを育てるにも、メス・オスいっしょなんだよ」

「ジロちゃん、よく知ってんのね」

ジュンも、たべる手をとめて、弟を見なおす気もちをこめていった。

「そんなに仲よしだからなんだね。ハトは、平和のシンボルだって」

タカユキが、首をよこにふった。

「ちがう、ちがう。ハトのケンカはすげえぜ。もっとも、オスとオスのケンカだけどさ」

*

とけいが、八時を告げた。

「おやすみ、おぼちゃん。あかんぼ、生まれそうになったら、いつでもたたきおこしていいぜ」

タカユキは、いつものように、すぐ、ねどこへもぐりこんでしまった。ラジオを枕もとへおいて、

プロ野球のナイターの放送をきくのだ。

ジュンは、進学準備の宿題の数学にとりかかる。その机のわきで、ハナエは生まれてくる赤んぼうのためにおムツをぬいそろえている。

八時三〇分。

ジュンは、とけいのセコンドが耳について、なかなか、勉強のなかへはいりこんでいかれない。「おぼちゃん。とうちゃんとか、ストの相談するなんて、いってなかった？」

「あんな小さな工場、ストやったら、つぶれちゃうよ。それに、働いているみんなだって、とうちゃんとおなじこと。一日でも働かなかったら干あがっちゃうものね、はははは……あっ、痛っ！」ハナエは、ぬいかけのおムツをなげだして、前こごみになる。

「だいじょうぶ？ おぼちゃん」

ハナエは、血の気のひいた顔をあげて、痛みを耐えながら、じぶんがいい聞かせるようにいった。「ジュン。びっくりしなくてもいいのよ。お産は、

「こわいことじゃないんだから」

「ね、もう、うまれそう？」

「うん。いっしょに、安井産院までいってちょうだい」

「え、いくわ、いくわ。持ってくるものは」

ハナエは、立ちあがって、

「この棚の上のフロシキづつみに……」

手をのばして取ろうとして、よろめいた。

「あ、あっ！」

「あぶないわよ」

ジュンは、ハナエをうしろから支えようとした。

ハナエは、うろうろと、座敷を一まわりする。その着物のすそに払われて、ばらばらと水のとぶのを、ジュンは見た。

「ジュン、水がでちゃった」

「あ、羊水？」

ジュンは、おもわず息をのんだ。羊水は、赤んぼうが生まれるとき、胎児をおしだす働きをする。女子だけの「保健体育」の時間に、ジュンらは、

そう教わった。それが早く出るといふのは……ジュンは、あわてて、何をしたらよいかわからない。ハナエの肩に手をかけて、おろおろする。

「しっかりしてね。ね、おぼちゃん」

「ううん、破水しても……」

ハナエは、かがみこんで、額に手をあてて、何かに耐えながらいう。

「でも、すぐには生まれやしないよ、ジュン」

しかし、ハナエにとって、はじめてのお産である。——早期破水……難産——最悪の場合のこともお考えに入れておかねばならない。ハナエは、自分もおろおろしているのに気づきながら、戸口へそろそろおろる。ジュンは、ちらっと、とけいを見あげる。八時四〇分すぎ。

「もう、九時にちかいもん。かあちゃんだって帰ってくるわよ」

ジュンは、自分にもいいきかせながら、手早くフロシキづつみをかかえて、戸口のタタキへとびおろる。ぞうりだ。ハナエのぞうりを、そろえて

出す。そのビニール製のが、なかなか叔母の足ゆびにつっかからない。ジュンは、ふるえる手で、持ちそえて、はかせてやる。

*

安井産院は、露路を出て五〇〇メートルほどいって、表通りに面した町並へでると、すぐにある。途中は、ゴミゴミした小住宅と、ところどころに小店と、トタン塀の小工場がまじっているドブ川沿いの道である。

一〇〇メートルもいくと、ハナエはしゃがみこんで、陣痛にたえた。

「おばさん、だいじょうぶ？」

「あ、……いた、た」

ジュンは、一気に走り着きたい気持ちをおさえて、しゃがみこみ、ハナエの手をとった。

しばらくすると、ハナエはたちあがった。そのまま、ジュンにもたれかかるようにして、そろそろ歩いていく。

すこしいって、また、しゃがみこんだ。肩で、

大きな息をしたまま、かすかにうめいた。

「おばちゃん、おばちゃん」

「……………」

「だいじょうぶ、おばちゃん」

「……………」

「ね、生んじやいやよ。ここで生んじやいやよ」
「うーん……、だいじょうぶ。あーあ、つらかった」

ハナエは、きゅっと唇をむすんで、あぶなっかしい足どりで、またあるきだす。

ふいに、九時をしらせるチャイムがあった。ジュンは、虚をつかれて、どきんとした。動悸がはやくなって、なかなかしずまらない。そのとき、うしろで叫ぶ声をきいた。

「おうーい、おばちゃん」

「あら」

二人は、立ちどまった。

「おうーい！ ねえちゃん」

「タカユキだわ」

仲秋にちかい半月が、人影をぬうつと浮かびあらせる。それが、走るようにして近づいてくる。ハナエが、おどろきをこめた声をあげた。

「まあ、お前。フトンを背負ってきてくれたの」「タカユキ、よく目がさめたな」

ジュンもおどろくの、それには答えず、タカユキはフトン包みが歩いていくようなかっこうで、二人をおいこしていく。すりぬけざまに、この親分は、どなるようにいった。

「おれ、先にいって、安井さんに、よくたのんどくからな」

いつものグズとは別人のような、シャンとした声音である。

*

ハナエが案内された産室には、タカユキのしょうてきたフトン包みがひろげられ、ベッドのしたくができていた。

三〇才ぐらいの体格のいい助手が、いった。

「さ、このベッドへ横になってくださいよ。いま、

難産で、院長先生の手がはなせないんです」

「難産って……どうしたのですか」

ハナエは、ドキッとした顔でうけとめて、不安げに、ジュンの方をふりむいた。ジュンは、廊下のむこうの、あわただしい気配をうかがうように耳をすました。

「子癇しかんなんです。ひどいケイレンがきちゃってね、子宮口が開ききっているのに、もう一時間も、赤ちゃんがうまれないでいるんですよ」

助産婦の資格をもつ助手は、なれた手つきで、ハナエにてつだって、腹帯を、するすると、といていく。

「じゃ、切開きっかいですか」

「まあね。いま、市民病院のO博士にきていただいて、内診ないしんをおえたところですよ」

「あ、いた……」

ハナエはベッドによりかかって、からだをエビのようにまげる。

「強くきますかね。さ、おじょうさん。産婦さん

の手をもってあげてください」

助手にいわれて、ジュンはあわてて、ハナエの手をにぎった。その手は、いたいほど強くにぎりかえされる。助手は、血色のいい太い腕を、ひじまでむきだして、ハナエの腹をさすりはじめた。「このへんでしよう。……何分おきぐらいに痛んできますか」

ハナエは、痛みが遠のいたところで、ほっと息をついた。

「はあ、五分おきぐらいに」

「強くさしこんできますね。……ああ、そうだ。ついでだから、O博士に、ちょっと見てもらいますか」

ハナエは、すこし考えてから、うなずいた。

「じゃ、博士にひとこと頼んできますから、おまちになつてね。おじょうさんは、そのまま。そうそう、そうして、みてあげてください」

助手は、ジュンに——かわったことがあったら、三室へだてた廊下のならびの産室へよびにくるよ

うに、いい残して出ていった。

「子癰って、どんな病気？ おばさん」

「とっても、こわいそうだよ。ガタガタ、フルエがきて、痛くて気が狂いそうになるんだってさ」そのとき、犬が遠吠えするような呻きごえが、むこうの産室から、きこえてきた。部屋が近いせいか、その産室のけはいや、金属の器具のカチャカチャふれる音など、はっきり聞える。

「死ぬの？ 子癰になると」

「たいてい、助かるんだそうだけどね。……あ、いた」

ハナエの陣痛のきざみが、間がちかくなった。いったん痛みが遠のいて、ひといきついたかと思つと、つぎの痛みが潮のよせるようにおそってくる。

「ジュン、また、手をかしてよ」

「おばちゃん。きつく握るといいわ」

「痛いよ」

「がまんしたげる」

しかし、ハナエは、ジュンの手に力をいれることさえかげんして、がまんしているようだった。

——わたしを、こわがらせまいとしてるんだわ。こどもだから、とおもって。

ジュンは、ハナエの額に、じっとり浮いてくるあぶら汗を、ハンカチでふいてやりながら、自分よりたよるもののないこの叔母が、しきりに気のどくになった。わざと明るい、いたずらっ子らしい声をつくっていった。

「啓吉おじさん。いま、赤ちゃんが生まれるなんて、知らんわね。きつと」

「知ってたら、そりゃ、朝鮮海峡なんかとびこえて、すつとんできたくなるだろうにね」

すうっと、音もなく、ドアがあいた。ハナエもジュンも、はっとして、待ちかねた目をそっちへむけた。だが、ジュンの母の姿はそこになく、フロシキ包みだけが、ぬうっと出てきた。

「ねえちゃん、これ」

タカユキは、ドアのかげにかくれて、フロシキ

包みだけを、つきだしているのだ。さっき、ハナエが用意してあるといった二包みの荷物のひとつである。

「まあ、タカユキ」

ジュンは、びっくりした。よく気がついた——とほめることさえ忘れて、むしろ、あきれ顔で弟をみた。

「かあちゃんは？ タカユキ」

「まだ、かえってこない。それで、工場までいいいったんだ。すぐ、とんでくるってよ」

タカユキは、殺風景な産室内をこわごわ見まわし、鉄わくのはまったベッドにねているハナエをのぞいてみた。そのときまた、けもののような呻きこえが、向うの部屋でおこった。

——うー、うーわあ、わわわあ……

「おっ！　ありゃ、何じゃ」

「病気の産婦さんだってさ」

呻きこえは高く、苦しげな尾をひいて、あえぎ、あえぎ、救いをもとめている。

「こわいな」

タカユキは、顔色をかえた。も一つの荷物をころがしこんで、あたふた、ひきかえそうとする。

ジュンは、そのあとを追って廊下へでた。

「タカユキ！」

タカユキの後姿へ、呻きこえは、一だんと高く狂わしげな呼吸で、よびかける。

——うおう、おう……わわわわあ……うおう！

バタン！と、玄関のガラス扉がはね返って、タカユキの姿は、外のくらやみへ消えていった。

ジュンは、産室へもどった。まちかねていたハナエは、激しい痛みのすぎさったあとの、血の気のひいた、うつけた顔をむける。

「ジュン、産婆さんは、まだかね……」

よわよわしい、苦しい声だ。

「むかいにいつてくるわ、おばちゃん」

「そしてよ。ああっ！」

ふいに、強い力で、ジュンの手がつかまれた。

「いた、いたい！」

幼児のような泣きこえた。

「あーあ、いたいよう」

そのハナエの手を、ジュンは、しっかりと、力をこめて握りかえた。

「おばちゃん、おばちゃん。しっかりしてよ、ね」

耳もとへ、口をよせて、叫びつづける。

痛みは叔母のうえに、すぐ、ぶり返しておそってくる。

「いたい！ うーん、うーん」

ハナエのうめきこえに、向うの部屋の呻りこえがかぶさって、ジュンは目がくらんだ。

こわいな！ ぎよろっと白目をむいて、逃げていったタカユキの気持そのままに、ジュンもにげだしたくなった。

ハナエは、ぐったりと手の力をぬいて、肩であえいだ。痛みが去ったのだ。

「おばちゃん。あたい、いつて呼んでくる」

握られた手をはなそうとすると、

「だめ、はなしちゃ、だめ！」